# 保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方
## －北欧を中心に世界の国を比較してみると－

北浦　かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
（大阪市立大学名誉教授）

### ６．家具や設備機器に対する考え方とまとめ

家具や設備機器を見て新たにわかったのは、デンマークでは保育施設における物や空間の計画が大人と子どもの両方の視点から検討されており、それを反映させる空間づくりや製品づくりが浸透していたという事です。

例えばおむつ替え作業は電動式で高さ調節できるステンレス製シンク台(図 1)で行われ、その横には子どもが自分で台の上に上るための、踏み台状の階段（図 2）が置いてありました。どの園でもそうなっており、保育士の職業病を軽減するために、大人と子どもが力をあわせているという感じがしました。トイレの踏み台や、介助用階段も設けられていました。

高さ調節は設計面でもきめ細かく行われており、大人用のキッチンカウンター台の前(図 3･4)には、子ども用の台が一段設置されていました。キッチンの調理台は、勿論高さが自由に調節出来る電動式がどの園でも見られました。

Borneinstitutionnen Englegaard(図 5)の様な比較的新しい昼間保育園では、大人用テーブルに合わせて様々な子ども用椅子が使われていました(図 6)。 日本では子ども用家具に窮屈そうに座っている大人の姿に違和感を抱いていましたが、逆に子どもが大人のセッティングに合わせているのをみると、不自然さや窮屈さが全く感じられません。

子ども達が様々な椅子を使って大人用テーブルを囲んでいるのが新鮮でした。同じ材質で造ることで、デザインの異なる木製椅子も調和し家庭的雰囲気を醸し出していました。

使い易さを考えてデザインしたというテーブルは、大人も子どもも手が届き易い様に三角形になっていました（図 7）。

棚類はさすが北欧にふさわしく、高品質で白木のものがあちこちで無造作に使われていました。個人収納用の白木の既製品の棚(図 8)が玄関近くにまとめて置かれており、個人用寝具も個々に棚に収められていました(図 9)。

またほとんどの保育園に、衣類や靴用乾燥機、寝具乾燥庫(図 10)、ナッピングルーム(図 11)等々が設置されており、基本的な日常生活そのものが大切に考えられていました。

当時、おむつ替え台を設けず子どものベッドを使用しておむつを替えていたのは日本と韓国だけでした。しかし、最近でもまだ日本では、専用のおむつ替え台を設けている保育園はあまり見かけません。生活習慣の違いからでしょうか？

アメリカではおむつ替え台の高さ調節までは考えられていませんでしたが、木製の既製品の作業台が設置されていま

図 1 電動式おむつ替台

図 2　子どもが上る階段

図 3 カウンター前の台

図 4 キッチンカウンター台

図 6 大人用家具に合わせて

図 7 三角テーブル

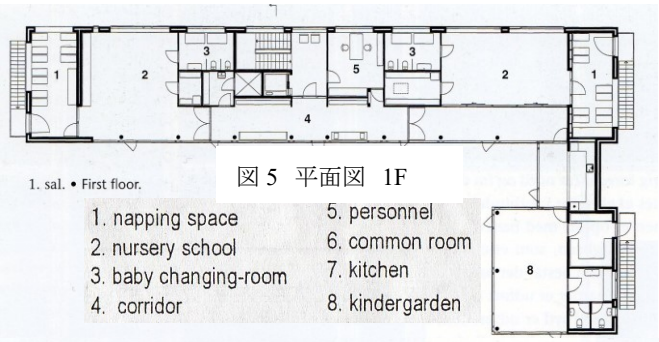

図 5　平面図　1F

図 5　平面図　GF

図 11 ナッピングルーム

図 8 個人用収納

図 9　個人用寝具

図 12　ImaginationCenter おむつ替え台

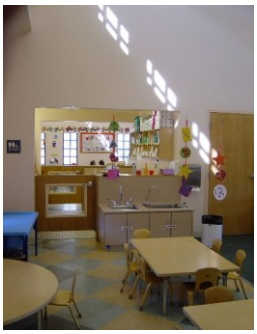

図 13 同左の室内側

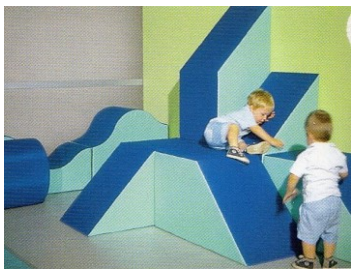

図 14　イタリア既製遊具

図 15 イタリア既製遊具 TOTEM

図 16　アメリカ大型遊具

図 17 アメリカの大型遊具
Toddler 用に区切った園庭

図 18　移動型保育園農家の庭

図 19 同左で木登り

した(図 12･13)。 特にアメリカで良く見かけたのは乳幼児用の大型乳母車(図 16)などです。カラフルな FRP 製で工業製品の様々な大型遊具が愛用されていました。

イタリアのおむつ替え台は、陶器製シンクが木製の台に造り付けにされたもので、高さ調節は出来ませんでしたが、子ども用の階段は置いてありました。　イタリアで目についたのは、芸術的で美しいデザインの子ども用家具や遊具でした(図 14･15)。洗練された魅力的なユニットデザインの遊具や家具が工業製品として普及していました。

どの保育施設に行っても、子ども達のまわりはそうした魅力的な遊具があふれていました。 イタリア人のデザインセンスはこんな風にして再生産されてきたのかな？とひとりで納得してしまいました。

多くのアメリカの保育園では、年齢別に園庭を区切って使わせていた事からも分かる様に、子どもの安全性を非常に重視していました。Infant 用、Toddler 用(図 17)等々4 区分して、子どもの運動能力の差でぶつかって怪我しないように配慮していました。大型遊具の周りは木やタイアの削片を敷き詰めるなどの対策がされています。こうした過度とも感じられる安全性の重視は、直ぐ訴えられる「訴訟社会」を反映して、アメリカ文化を端的に象徴していました。

寒く、日が短い冬に代表される北欧の気候では、日光を取り込む工夫をした建築や、自然をとり入れた広がりのある園庭が重視され、移動型(図 18･19)や森の保育園など出来るだけ自然の中で過ごす時間を確保する努力がされて来ました。 本連載では煩雑になるので具体的な日本の夜間保育の情報についてはほとんど述べていませんが、温暖な日本ではテラスやバルコニーなど、内外空間の中間領域を遊び空間として活用しているのが特徴でした。

床座の系譜を持つ点で韓国と日本の起居様式は同じでしたが、韓国では自由遊びが少なく地下室を活用したサムルノリや英才教育が重視され日本と共通点はありませんでした。

**まとめ**

紹介してきた施設はそれぞれお国柄があり千差万別、ハードもソフトも様々でした。 当時の調査を振り返ってみて気づいたのは、そうした施設のあり方の基盤に子ども達への多様な思いが共通して感じられたことです。

「子どものためのデザイン」とは、子ども達の未来を育てて行くために受け継いできた、その国の人々の思いすなわち子どもの文化のあり方を守っていく事でもあると思われます

現代の高度な技術革新と、大量な情報を精査する中で、見えにくくなってしまった子どもを慈しみ育てて行きたいという各国の人々の素朴な思いが、そんな状況の中でも受け継がれているのを強く感じました。

デンマークの保育園の地下室に設置されていた核シェルターを見た時の衝撃は忘れられません。子どもを大切にすると評されている日本の文化でも、保育園に核シェルターが先行して設置される事はないでしょう。

グローバル時代にあって、国の枠を超えて子ども達の生活環境のあり方を見ていく事はとても重要です。

それとともにこの調査で強く感じたのは、子どものためのデザインとは、「人間を大切にする姿勢と価値観」であり、また「文化における子どもの位置づけ」と、「風土にもとづいた建築的環境」の重要性と言うことでした。

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所(現･浦辺設計)を経て大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。NPO 法人子どもと住文化研究センター理事長。居住空間デザイン学及び環境心理学。 主著書に、「世界の子ども部屋」「住まいの絵本に見る子ども部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」